
奥様はボーカロイド

上梓あき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奥様はボーカロイド

【Nコード】

N3771T

【作者名】

上梓あき

【あらすじ】

「・・・自分、結婚しようと思った。」

「結婚するって、・・・ひよっとしてOS娘と、か？」

「今の所、秘密。」

「おい、水臭いぞ。『としあき』は兄弟じゃないか。」

これは以前、+にじうら+へ投稿した物です。

1、

「・・・自分、結婚しようと思ったんだ。」

この一言に座は静まり返る。

ここはとある居酒屋、としあき達の酒宴が開かれている最中。

「結婚するって、・・・ひょっとしてOS娘と、か？」

「今の所、秘密。」

「おい、水臭いぞ。『としあき』は兄弟じゃないか。」

実体化現象の発生から数ヶ月、としあき達の間では結婚ラッシュが起き始めている。

結婚の相手は無論のこと、自分のPCの中に存在していたOS達。

俺が結婚を口にした途端、兄弟であるとしあき達が黙り込む理由はわかる。

皆、同じ事を考えているからだ。

「で、相手は既に居るのか？」

「いや、これから手に入れようと思ってる。

それで来週の日曜、数年振りで秋葉原に行こうと思っているところだ。」

「そうか、秋葉原か・・・」

ツレのとしあきの一人がにやりと笑う。

「行ってみろ、驚くぞ・・・っと、電話だ」

こいつはそう言うのと、携帯を取り出して話し始める。
近くのファミレスに行った女衆からの連絡だろう。

「ああ、９８、俺だ。

（電話の向こう「お兄い、ボク達の方は１９時にお開きとなったから」）

ああ、わかった。あと３０分程だな。その頃に迎えに行く。

・・・みんな、ラストオーダー、いいか？」

３０分後、居酒屋の精算を終えた俺達はファミレスの前へとやって来た。

「お兄い、お待たせ。」

「ああ。」

「としあきさん、ごめんなさい。お待たせしてしまって。」

「そんな事ないさ。」

俺の兄弟達は自分のパートナーと言葉を交わし、女衆の腕をとってエスコートする。

「じゃあ、また。」

兄弟達に別れの言葉を掛けて、俺は離れた。

2、

一週間後、秋葉原。

——驚いた、アベックしかいない。
アキバがこんなになっていたとは。

マスコミ報道で状況は把握していたつもりだったが、まさかここまでとは・・・。

大通りの歩行者天国を歩きながらそう思う。

なによりも通行人の男女比率が逆転してしまったせいで、路地裏ですらどこか青山界隈の様に華やいで感じられる。

それには客の顔ぶれが変わったことが大きい。

以前ならばパーツショップはコアなマニアの溜まり場だったのだが、実体化以来、野郎共はOS娘を連れて店に来る様になっている。

それというのも、二人で来た方がパーツ選りなどで都合が良いからだ。

結果、店側も実体化したOS娘を雇う様になり、ますます、「女の街」に近付きつつある。

俺はホコ天廃止直前の頃とは様子が一変してしまった街並みを観察する為に、路上に出ていたアイスクリームスタンドの椅子に腰を下ろした。

「いらっしやいませ、御注文は何になさいます?」

「ジェラート、バニラのを」

注文を取りに来た店員らしき2Kにオーダーを伝えると、俺は再び周囲に目を遣る。

日本刀を抱えた着物姿の女性が主人と何やら話している。

「・・・いやですわ、としあきさん。

私の様な古い女、そんなに気を遣わないで下さいまし。」

自分の後を三歩下がって歩く女性との会話を楽しんでいる男の姿がすぐに目に飛び込んで来る。

意外に95の姿が多い。

「えっ、お兄い、このUSBメモリ、いいの?・・・うれしい」

その向う、とあるパーツショップの前では、涙ぐむ98を抱き抱えるようにして愛撫する男の姿があった。

・・・あの劣情にまみれたアキバがこうも変わるとは。

「・・・御注文の品、お届けに参りました」

「あつ、有り難う」

店員の声で我に帰った俺は、ジェラートを届けに来た2Kに少し質問しようと声を掛ける。

「一寸いいかな？」

3、

店員の話と俺の記憶を纏めてみるとこういう具合になる。

「実体化」はアキバをOS娘達の日用品調達の場所に変えた。この結果、打撃を受けたのはアキバの萌えビジネスだった。

生身の「萌え」を売り物にした店のかなりが潰れ、「BAKA48」なるアイドルユニットの姿は消えて、今では話題にすら上らなくなっってしまった。

そして今ではこれらの跡地にはパーツ関係の店が入居している。

歩行者天国が復活したのにも、「実体化」は関わっている。

端的に言って、実体化した彼女達の存在が街の風紀を改善したのだ。

アキバは彼女達OS娘にとっても重要な場所であり、としあきがアキバへ行こうとすると彼女達も付いて行きたがる。

よって当然の事として、付いて来た彼女の手前、としあきも自重せざる負えない。

また、破廉恥な「自称タレント」に対するOS娘達の厳しい視線もあり、そういった有象無象が来辛い環境になりつつある。

「（よし、もうちょっと歩いてみよう・・・）」

ウェイトレスの2Kに声を掛け、俺は道を行くとしあき達の幸せそうな表情を横目に歩き出す。

「（・・・確かに牛丼屋が多い）」

テレ東のWBSによると現在の秋葉原は牛丼屋の最激戦地なのだそうだ。

ぐるり辺りを見回しただけでも街角ごとに、「なかう」「好きや」「マツヤ」「佳乃家」のどれかが必ずあり、何処も繁盛している。

佳乃家に至っては「my丼・pro子専用」の店まで出店しているほどだ。

なんでも、my丼持参のpro子は並盛価格で特盛が食べられるらしく、秋葉原における、大喰らいのOS娘持ちのとしあき達によって救世主として崇められているらしい。

大勢のpro子が主のとしあき達と牛丼を楽しんでいる姿がガラス

越しに見える。

「ええと・・・ここだっけ？」

俺はOSたん専門のランジェリーショップ——OSたん向けに特殊な機能が付加されたランジェリー類は登場以来物凄い売れ行きを示している——のある角を曲がって中央通りを離れた。

4、

中央通りから二本ほど西へ入った道にその店はある。

「ああ、ここだ・・・。スタン。イ・・・懐かしいな」

『アキバよ、わたしは帰って来た。』そう書かれた暖簾をくぐって店内へ入り、ボーカロイド売り場へと向かう。

「お客さん。どう？わたしを買わない？今週発売の新作エロゲよ？」

「ねえ？ わたしなんてどうかしら？ どんなハードプレイにも対応出来るわよ」

商品の前を通る度、パッケージの中からおにやのこたちが飛び出してきて熱っぽいセールストークを繰り返す。

・・・どうやらこの二人は学園モノと調教モノのヒロインらしい。

「あ、あの・・・わたしを買って下さいませんか？
・・・あ、あなたのお嫁さんに・・・なっても・・・いい・・・
ですから・・・」

俺の袖を引っ張りながら、別のエロゲのヒロインが話し掛けてくる。
こちらはどうかやら純愛モノのゲームらしく、彼女の顔は真っ赤だ。

「ごめん。今日は他に買う物があるんだ。済まないね。」

「じゃ、じゃあ、今度来る時にはわたしを買って行って下さい・・・」

「

彼女は俺の右手を自分の胸に押し当てながら上目遣いで話し掛ける。
彼女の瞳からは一雫の涙が零れた。

「また・・・来て下さい・・・」

彼女の小さな呟きが背後から追い続ける。

「あゝあ、正統派ヒロインにはかなわないね。」

別のゲームのパッケージから運つ葉な声でばやきが聞こえて来た。
多分、『ガ○ツ』の新作あたりだろう。

5、

目当ての物は目の前にあった。

「余りお金使いたくないな。やっぱり一粒で二度おいしい方がいい

か。
」

俺は散々独り言を口にした後、ようやくお目当てのモノを手にとった。

（無論、独り言をぶつぶつ言ったのは本心を隠す為だ）

「（これがKAITOか・・・）」

俺は独り北叟笑むとレジへ向かった。
ほくそえむ

6、

帰り道での俺は天にも昇る気持ちだった。

なにしろこれで俺の憧れの女の子が手に入るのだ。・・・多少の間は掛かるが。

俺は浮き足立つ気持ちを抑え切れずに電車に飛び乗った。

部屋に戻ってきた俺は真っ先にKAITOのシュリンク包装を剥ぎにかかる。

「うわあああつ」

余りにいきなりの事にKAITOはパッケージの中から悲鳴を上げた。

「じつ、御主人様。おつ、落ち着いて下さい。
ぼつ、ぼくは何処にも逃げませんから。」

「ねっ？ 御主人様。
そんなに乱暴にするとパソコンに入れる前にCDが壊れてしま
います」

返事をするのもどかしく、俺はpro子の電源を入れ、トレイに
ディスクをセットする。

インストールの進展とともにパッケージから抜け出して来たKAI
TOの姿が徐々にだが質量を持ちはじめ。

「御主人様。」

真っ直ぐに俺を見詰めるKAI TOの瞳を見ていて辛抱が堪らな
くなった俺はいきなり襲い掛かる。

「うわああああ！！！」

KAI TOが上げる悲鳴を無視した俺は、息を殺してコイツを抱き
締め、問答無用で唾液を口の中に流し込む。

「う・・・げほっ！げほっ！！」

予期しなかった突然のフレンチキスで、俺の唾液が気管に入っ
てしまったのだろう、KAI TOは咳き込む。

その間に多少の冷静さを取り戻した——当然だろう。欲望を少な
りとも満足させたのだから。——俺はKAI TOのジェンダー設定
をマウスで弄る。

「ごっ、御主人様。いつ、いきなり何をするんですか！？」

K A I T O の問い掛けは言葉が震えている。
酷く狼狽しているのが手に取る様にわかるほどだ。

「K A I T O、お前は今から俺の嫁だ。
K A I T O、いや、K A I K O。お前を俺の女にしてやる。」

叩き付けた言葉と同時に俺はK A I K Oを襲う。

「ひっ！ きゃああああっ！！！・・・え？」

自分自身が上げた悲鳴に驚いて、K A I K Oは自身の身体を凝視し、
絶望の表情を浮かべる。

「な、何をしたんですか・・・ご、御主人さ、ま・・・？
……わたしの身体、女の人になって・・・る・・・」

自身が女になっている事に驚愕した表情のまま、呆然となったK A
I K Oが問い掛けてくる。

「……わたし、これからどうなってしまうんですか？ ますたあ・・・」

「お前は俺の花嫁になるんだ！」

「・・・・・・・・あ、ああ・・・・・・・・
・・・・・・・・大切にして下さいね・・・・・・・・ きっとですよ・・・・・・・・」

「ああ、約束する。お前は俺の女だ。」

「・・・もう、・・・もう、・・・戻れないんですね・・・」

・・・to be continued? ? ?

(後書き)

ちなみにOS擬人化ってこんなの←

http://www.nijura.jp/os/index.
htm

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3771t/>

奥様はボーカロイド

2011年10月9日03時15分発行